

総合実習：基礎看護実習の 目標達成度と指導法の試案

＝ 速 報 ＝

藤原 幸江

近代看護への先駆けとなったFlorence Nightingaleの提言を契機として、看護の概念がここ数十年にわたって大きく変貌していることは周知のところである。現在、看護婦が自らの職務について希求するものは「看護ケアの計画と提供、そしてその評価を健康の保持・増進、疾病の予防と患者のケア、および社会への復帰など、あらゆる状況の中で一連のものとして、実施すること」である。従って、基礎的な教育は広範囲に、確実に提供されるべきであり、その教育は卒業後教育を受けて、既習の看護過程をさらに発展させて、実践する能力に備えるものである（I. C. N.：看護の定義、1975年）と言われている。この「確実にして、広範囲な基礎教育」を行うための最も有効な教育課程とは、どのようなものであるのか。Kathleen K. Guineeはその著『看護教育の目的と方法（稲田八重子訳、医学書院、1970）』に、看護教育の目標を次のように括めている。①倫理・教育水準を高めること、②社会面の理解を高めること、③職業能力を育成すること、④看護学生の知的能力を高めること。この四つの柱を志向するためにも、教育としてのより根本的な究明が必要となってくる。

わが国の保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則は昭和43年に各界の胎動を受けて改正されたが、基礎教育を重視するという面からも、また専門職業人としての全人教育を行うという面からも、十分と言えるものではなく、姑息的な改正であったと思う。この改正された教育課程には新しく、**総合実習（120時間）**が加えられ、その授業の内容として**基礎的な実習と総括的・完成的なもの**としての実習という、学習の双極にわたるものを目するようガイド・ブックに記載されてある。しかし、筆者は後者に示された**総括的・完成的なもの**は、むしろ**卒業後教育**に委ねるべきものであると考える。その理由は次の通りである。① I. C. N. による「看護教育の目標」を容認する。② Kathleen K. Guineeの示した4つの柱は将来の向上を目的とした、基礎的能力の涵養を強調したものであると考える。③ 我が国の看護婦養成の教育課程で、新しく加えられた総合実習の時間（120時間）は実習の総時間数（1,770時間）に比して、余りにも僅少に過ぎ、基礎的な実習に費されるべきものであると考える。

筆者は昭和51年より、総合実習を効果的なものとするために、基礎的な領域の実習とすべきであると考え、**総合実習 I**（「看護技術実習」で習熟した技術を、患者に実際に実施する）と**総合実習 II**（病院で行う基礎的な看護実習）とに区分し、Iは二年次前期（1単位、45時間）、IIは二年次後期（2単位、90時間）とに実施することにした。

総合実習 II では、学生50名を8群に分け、各群に専任教員1～2名を専従の指導教官として配した。指導教官は9名で、各人には**実習の目的・目標**（表1）を示して準拠するように指示し、実習方法（内容）については各指導教官の独自性に委譲し、自由さを大いに認めた。

実習終了後、9名の指導教官が一堂に会し、指導方法（内容）と実習目標の達成度とについて話し合った。実質的な実習の達成度については学生に課した報告書の提出をまって、十分に検討し、解析せねばならないが、それには日時を要するので、ここでは教官相互の評価と学生に求めた調査票*の集計結果（後日詳報）とによって、筆者が主観的に括めたものを比較検討した。

表Ⅰ 総合実習Ⅱの目的および目標

<p>I. 目的： 受持患者との間に、助力的関係を確立し、患者の基本的要求に沿って必要な看護ケアを行う。</p> <p>II. 目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 患者との間により人間関係をつくる。 2. 患者の基本的要求に沿って必要な看護ケアを行う。 <ol style="list-style-type: none"> ② 受持患者について必要な情報を集める。 ② 集められた情報を基礎的知識に照らして分析し、問題点を抽出する。 ③ 問題点を整理し、看護計画を立てる。 ④ 計画に基づいて基礎的看護（基本的生活援助技術）を実践する。 ⑤ 患者の反応・計画の適否について確認し、看護過程を評価する。
--

図1は学生の実習群（8群）のうち、代表的な4群（A群とB群、およびD群とE群）について、実習オリエンテーション（ⅠとⅡ）の満足度を項目別に示し、実習の達成度（ⅢとⅣ）とを対比している。この4群について、次の事が判る。すなわち、

- ① 「Ⅳ. 看護実践」の達成度はA群およびB群で高く、D群およびE群で低い。とくに、「Ⅱ. 実習中のオリエンテーション」の中、**看護計画の立案**についての内容と、これに費す時間などの実施方法の良否に左右される。
- ② 「Ⅲ. 患者との関係」の達成度は各群ともに高くはない。
- ③ 「実施結果の評価」は各群ともに厳しいものとなっている。

※ 調査票（表2）は表1に示した実習目標と事前に定めた評価項目とを対照して、学生個々の達成度を知るように設計したものである。

以上の事から、総合実習Ⅱの実習方法（内容）としては、「Ⅰ. 学内オリエンテーション」には余り時間を費す必要はなく、むしろ「Ⅱ. 実習中のオリエンテーション」として、**計画案の指導、ケアの実施、記録上の指導**、および**実習目標の設定**（毎日の実習の中で、時宜を得た適切な指導）といった**実習中の学生個々の動き**について重点的に指導すれば、達成度の向上に資するものであることを知った。

この事を基盤として、次年度（昭和53年度）以降の実習方法（内容）の設定を行い、僅少な時間によって総合実習に課せられた目的の達成を期するために速報する〔詳報は「看護教育(医学書院)」 Vol. 18、 No. 8、 1978年に掲載予定〕。

稿を閉ずるに際し、本研究の協同研究者である本学・若林敏子講師並に片山信子講師の労苦を謝するとともに、終始御指導頂き、貴重な御教示を賜わり、ご校閲頂きました本学教授・三木福治郎博士に衷心より感謝の意を表します。

表2 調査表(項目のみ)

<p>問1. グループ別オリエンテーションでどのような学習をしたか。</p> <p>イ. 患者との関係(看護面接・会話記録・会話分析・態度分析)について学習した。</p> <p>ロ. 看護計画について。</p> <p>ハ. 観察法(情報収集)について</p> <p>ニ. 情報の処理(看護診断)について学習した。</p> <p>ホ. 看護計画の立案(成文化の方法)について。</p> <p>ヘ. 実施結果の評価(検証)の方法について。</p> <p>ト. 看護実技について</p> <p>チ. 受持患者についての説明を受けた。</p> <p>リ. 受持患者の疾病や看護について。</p> <hr/> <p>問2. 患者との関係は実習期間を通観してどのようなであったか。</p> <p>イ. 患者との間に親和関係を持つことができた。</p> <p>ロ. 患者は自分の考えを私に話してくれた。</p> <p>ハ. 患者の方から私に心の悩みを訴えてきた。</p> <p>ニ. ナースも知らないような悩みをうちあけられた。</p> <p>ホ. 患者は私の来るのを待っていた。</p> <p>ヘ. 患者の方から私に用事を依頼することがあった。</p> <p>ト. 患者に対して理解の態度がとれた。</p> <p>チ. 患者が不安・悩みなどを訴えたとき、激励や評価をせずに黙ってきくように努力した。</p> <p>リ. 患者の悩みを自分のもののように感じる事ができた。</p> <p>ヌ. 私の方から患者に質問することはつとめてさけた。</p> <p>ル. 患者の悩みを正しく理解できているかどうかには注意をはらった。</p> <p>ヲ. 患者が悩みや不安を訴えてきたとき、患者の行動を指示するような言動はつとめてさけた。</p> <p>ワ. 患者との関係を記録・分析することができた。</p> <p>カ. 患者と私の相互作用の変化に注目した。</p> <p>コ. 患者との関係の深まりを自覚した。</p> <p>ク. 患者の療養態度に変化がみられた。</p> <p>ケ. 患者と私の相互関係から看護者としての自分の態度を評価・考察した。</p> <p>コ. 患者と私の相互関係の変化を記録にとどめた。</p> <hr/> <p>問3. 看護過程学習でどのような学習をしたか。</p> <p>イ. 受持患者について必要な情報を集めた。</p>	<p>ロ. 基本的欲求に属する課題毎に観察点を把握した。</p> <p>ハ. 患者の入院生活上の規制の状況をとらえた。</p> <p>ニ. 患者の今までの生活習慣と入院中の日課について知った。</p> <p>ホ. 病棟の日課とチームの看護目標について知った。</p> <p>ヘ. 病棟の日誌・指示録・カードックス等から患者の情報を得た。</p> <p>ト. 集められた情報を基礎知識に照らして分析し、問題点を抽出した。</p> <p>チ. 観察した事柄について異常なもの、気になることは何かをたしかめた。</p> <p>リ. 集めた情報を基礎理論に照らして分析した。</p> <p>ヌ. 問題点とした理由をはっきりさせた。</p> <p>ル. 問題点を整理し、看護計画をたてた。</p> <p>ヲ. 看護上の問題となるものを課題毎に整理した。</p> <p>ワ. 問題点にそって目標(中位目標)を定めることができた。</p> <p>カ. 目標にそって具体的な解決策(下位目標)が計画できた。</p> <p>コ. 患者の看護上の方向性(上位目標)が決定できた。</p> <p>ク. 看護計画を成文化した。</p> <p>ケ. あなたの立てた看護計画は、看護上有効であった。</p> <p>コ. 病棟日誌又はカードックスに立案した看護計画を転記した。</p> <p>ク. 立案した看護計画はチームに活用された。</p> <p>ケ. 看護計画に基づいて基礎的看護を実践(以下「ケア」と言う)した。</p> <p>コ. ケアは患者に喜ばれた。</p> <p>ク. ケアは計画にそっていた。</p> <p>ケ. 技術は確実にできた。</p> <p>コ. ケアは患者の安全性・安楽性を考慮して行なった。</p> <p>ク. 状況に応じた手順の変更・緩急順位の選択ができた。</p> <p>ケ. 患者の反応・計画の適否について確認し看護過程を評価した。</p> <p>コ. ケアの結果、よかった点、悪かった点、およびその理由づけを明らかにした。</p> <p>ク. ケアが不適切な場合、その修正ができた。</p> <p>ケ. ケアが適切な場合はより強化した。</p> <p>コ. 看護計画の有効性を実践との対比においてたしかめた。</p> <p>ク. 患者の反応に注目し、指導者の評価をうけた。</p>
---	--

図1. オリエンテーションの満足度と実習達成度との関係 (その一)

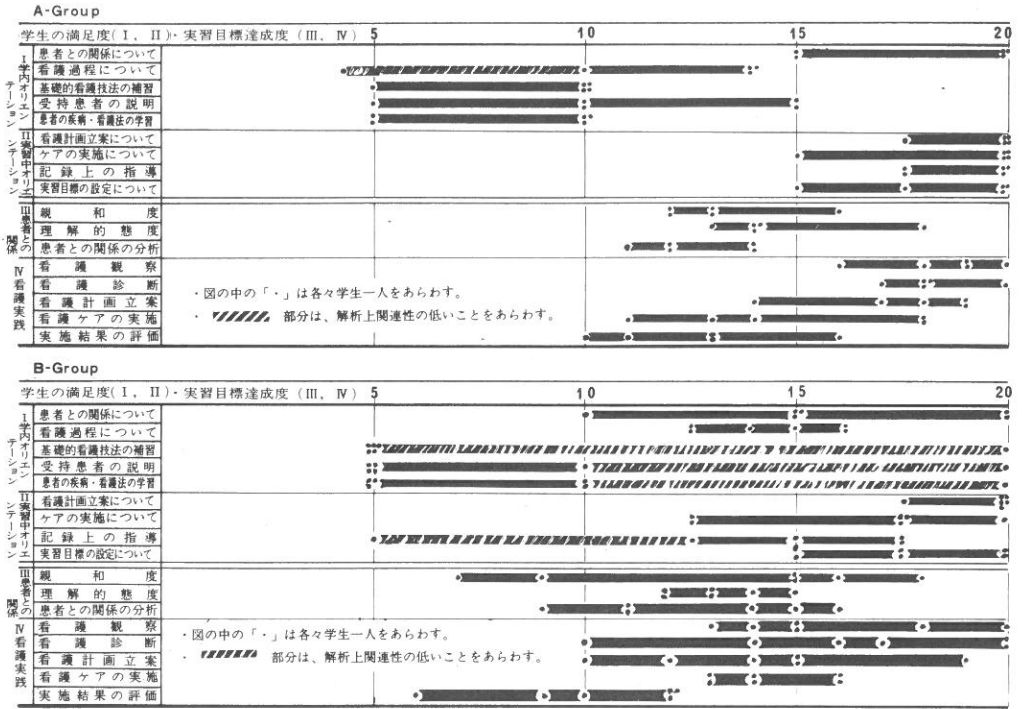
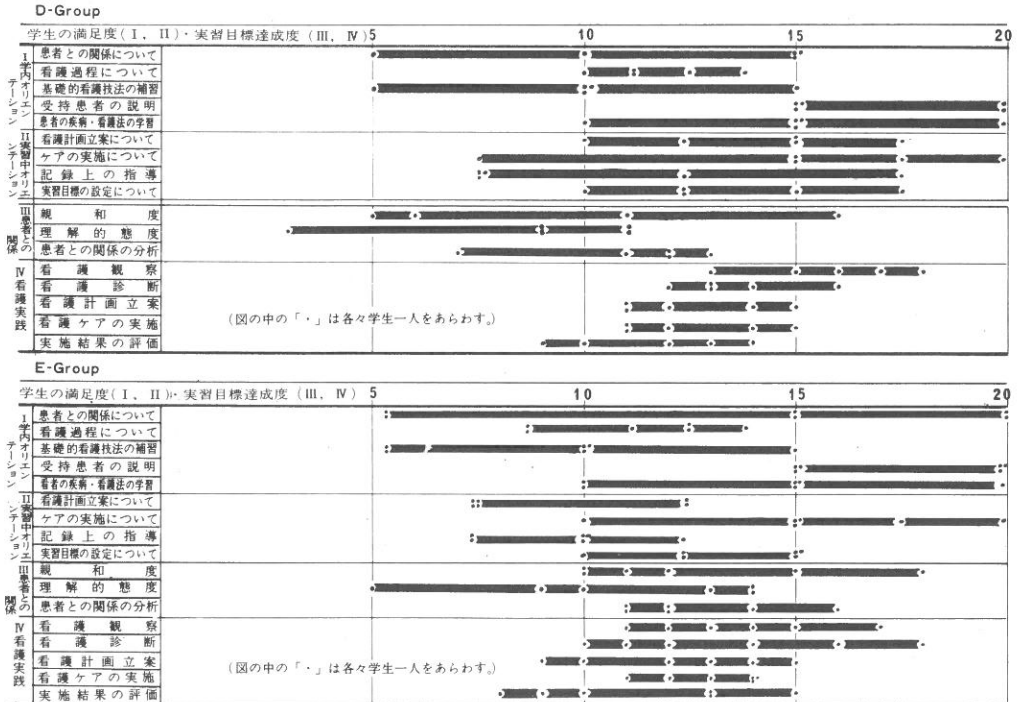


図2. オリエンテーションの満足度と実習達成度との関係 (その二)



昭和53年3月31日受理